寺子屋とその師匠

――――――――――――――――――――― 史学班（徳島史学会）―――――――――――――――――――――

稲飯　幸生[*1]

１．はじめに

『日本教育史資料』第九冊（明治25年文部省蔵版冨山房刊行）に所収されている明治初年の徳島県下の私塾・寺子屋の一覧表には佐那河内村の私塾・寺子屋の記載はない。

しかし、村内には寺子屋が各地域に存在していた。『佐那河内村史』（780～781頁）にはその状況が一覧表として掲載されているし、寺子屋師匠の墓の調査や、その家系に繋がる人や地域の人々からの聞き取りによると、江戸末期には多くの寺子屋があった。佐那河内村は町村制実施以前には、上佐那河内村・下佐那河内村に分かれていた。このうち下佐那河内村の嵯峨地域は嵯峨川の流域で、独立した地域である。このような事情からこの調査では嵯峨を含めた三地域に分けてまとめた。

２．上佐那河内地域

この地域は佐那河内村の西方地域で園瀬川の上流にあたる。この地域の寺子屋師匠は次の人がいた。

１）瀧倉伊平

生没年不詳

この人の寺子屋を上佐那河内小学校の分校とした。（明治15年［1882］１月）。伊平はこの小学校の教師をした。地域の言い伝えでは一宮（徳島市）の出身であったと云われている。

２）若林順吾

天保13年［1842］２月10日生

明治32年［1899］12月19日没

自宅で寺子屋を開いていた。字秋城（あきしろ）の共同墓地に墓があり、58才で没している。台石に「門弟中」との刻銘があったといわれているが墓はまとめられて、今では見ることができない。

３）井開（いがい）為太郎

弘化元年［1844］10月２日生

大正７年［1918］12月２日没

自宅で寺子屋を開いていた。ここは、のちに上佐那河内小学校の本校になった。明治初年には神山町鬼籠野（おろの）字一ノ坂でも寺子屋を開いている。

４）長尾嘉太郎

文政４年［1821］12月19日生

明治26年［1893］12月16日没

自宅で寺子屋を開いていたが、詳細は不詳である。明治28年に一家は徳島市へ移転した。

３．下佐那河内地域

この地域は現在の佐那河内村の東方地域で、徳島市に接する地域である。地域の中央を園瀬川が貫流している。上佐那河内地域よりも平地が多い。この地域には次のような寺子屋師匠がいた。

１）椎野柳左衛門

生年不詳

元治元年［1864］９月７日没

下八万村よりこの村に来て、現在の安喜（あき）哲夫宅（字根郷（ねごう））で寺子屋を開いた。当主の安喜鋪太郎が早死にしたので、その妻と結婚して安喜姓を名乗った。安喜家の墓地に墓があり、「良月是空信士・安喜柳左衛門」とある。その妻は文久２年に52才で没

＊１　神山町下分

している。

2）吉野数衛

生没年不詳

法華山正覚院と称する修験道の寺で、自宅で寺子屋を開いた（**写真1**）。学制頒布後、この寺子屋が下佐那河内小学校の本校となり（明治14年［1881］7月10日）、字高樋（たかつい）および中辺（なかへん）に分校を設けた。吉野家の墓地に「師匠の墓」と呼ばれる墓があり、それには「蓬仙・文化11［1814］甲戌年3月初9日・行年69・中興三世・正覚院」と刻まれている。その隣に妻女の墓があり、それには「文政9丙戌年［1826］8月25日・遊仙院謹唱妙頌大姉・正覚院室・行年80歳」とある。

写真1　吉野数衛の寺子屋。修験道の寺で法華山正覚院という。

3）赤堀光安

生没年不詳

医師で根郷で寺子屋を開いた。その他については不明である。

4）法師宥栄

生没年不詳

字根郷の安喜家の墓地に墓がある。「法師宥栄霊位・明和2酉天年［1765］4月17日・寺子中」とあるので、師匠をしていたと想像されるが、この人については地域の言い伝えもなく、詳細不明である。

隣に並んで妻女とおもわれる人の墓がある。
それには「知教信尼墓・天明7丁未年［1787］7月晦日・行年68歳」とある。

5）山本弥平

文化13年［1816］5月7日生

明治22年［1889］3月2日没

自宅で寺子屋を開いたと伝えられているが、この人の事跡については不明である。

6）山本磯太郎

生年不詳

弘化元年［1844］2月24日没。

自宅で寺子屋を開いたと伝えられているが、詳細は不明である。

4．嵯峨地域

この地域は下佐那河内村に属していた。嵯峨川という小さな川の流域で、かつてはみかんの産地として有名で、裕福な地域である。

1）佐々木弥兵衛

文化8年［1811］7月2日生

明治27年［1894］3月28日生

承久の変に際し、神山町鬼籠野字一ノ坂で滅亡した佐々木氏の後裔と云われれている。

弥兵衛の子の円次郎は寺子屋の助手を務め、孫の光助は後に佐那河内村長となった。

寺子屋廃止後、字高樋に下佐那河内小学校が創立されたが、嵯峨地区は遠距離にあったので、通学に不便であった。そこで自宅の部屋を開放して、近所の子どもを早朝から教え、「通暁（つうぎょう）小学校」と称した。

現在の佐々木氏宅のすぐ上に墓地がある。墓石には「天徳院仁寿哲翁居士、明治27午旧年［1894］二月廿日、俗名・弥兵衛、行年・86歳」とある。

隣に妻女の墓が並んでいる。

2）三宅貞之進（徳島の人）

3）野木瀬次郎（上八万村）

『佐那河内村史』によると、以上二人は下佐那河内村408番屋敷および下嵯峨の丸田共有家屋で寺子屋を開いたとある。寺子屋開設の時期も、天保から安政のころで、両地域にわたって子どもを教えていたのであろう。

4）佐東与平

生没年不詳

自宅で寺子屋を開いていたが、その他については不詳である。

5）市原希福

生年不詳

明治35年［1902］1月22日没

字丸田で寺子屋を開いた。丸田共同墓地に墓がある。墓石には「照徳院宣猷居士、明治35年旧正月22日卒去、春秋80歳、弟子中」とあるので希福の没後、門弟たちが建立した「筆子塚」であることがわかる。

墓の左側面には次のような刻銘がある。

前日、徳島藩士、矢野冨之助希福、故有テ当村ニ来リ、市原ツネカ入夫トナリ、日来、教育事業ニ従事シ、漢文及ビ書画ヲ能ス。

なお、『徳島藩士譜』下巻（310頁～311頁）には希福について、次のように記載されている。

九代　矢野冨之助希義

1、天保11年［1840］8月3日相続

2、四人御扶持方　御支配10石（中小姓格）

3、御膳奉行

4、嘉永元年［1848］9月21日

西の丸に乱心者入込候節、見流罷在候段、不届ニ付、役職召放。

墓石にある「故有（ゆえあり）テ」とはこのことで、西の丸へ乱心者が進入したときに、取押さえができなかったのであろう。

希福はこの地に来て寺子屋師匠をしていたが、市原ツネを妻として市原姓を名乗り、この地に住み着いて一生を終えた。希福が市原家に入った後、市原家は屋号を「矢野」と言ったという。

なお、墓石の名は「希福」であり、『徳島藩士譜』（310頁～311頁）は「希義」であるが、同人と思われる。

希福の墓は現在でも「矢野先生の墓」と呼ばれ地域の人に敬われている。

ツネの墓は希福の傍らにあり、「明治40年［1907］旧12月16日、自覚妙恵信女、俗名ツネ、83歳」とある。

この夫妻はこの当時としては長命であった。

6）国原弥三郎

文久3年［1863］9月20日生

昭和8年［1933］10月2日没

丸田共有家屋で子弟を教えた。この人は明治年間に小学校が創立された後も寺子屋を開いていたのでなかろうか。村に小学校ができても授業料を徴収せられることや、遠距離通学の問題があり、従来のように寺子屋に子どもを通わす親が多かった。このようなことは各地で行われていたことである。

墓は丸田共同墓地にあり、妻ヤエと並んで葬られている。「昭和8年癸酉年［1933］10月2日、旧8月13日、国原弥三郎事、年72歳」とある。

7）佐東誉平

生年不詳

明治12年［1879］8月24日没

自宅で寺子屋を開いたといわれているが、詳細不詳である。墓は南向きのみかん畑に妻女と並んで建てられている。「明治12年8月24日、清誉浄応信士、俗名　誉平」とある。

5．寺子屋屋敷と丸田共有家屋

『佐那河内村史』によると、嵯峨方面の寺子屋は丸田共有家屋を使用したとの記載がある。このことについて、この度の調査で土地の古老より聞き取りをしたが、その位置についてははっきりしない。

『村史』によると、この共有家屋を利用して寺子屋を開いた人は次の人々である。

天保時代	岸　三益	
	三宅貞之進	（徳島の人）
	野木　文徳	（上八万村）
	野木瀬次郎	（上八万村）
安政時代	笠原悦之助	
明治時代	矢野冨之助	（市原希福）
	鈴木儀三郎	
	国原弥三郎	

前述の市原希福もこの共有家屋を利用しているが、この地域には「寺子屋屋敷」と呼ばれる畠がある。この畠は希福の寺子屋の跡で、そのすぐ上段の畠に居宅があったと云われている。これらから類推すると、寺子屋屋敷と云われている畠に共有家屋があり、寺子屋に使用されたのではないだろうか。

この畠は現在ではみかんが植えられており、中央を新しい道路が開通しているが、古い井戸が残っている。希福の墓はこの畠の上段にある。

6．鉄復堂の生家

幕末の儒学者として有名な復堂は、上佐那河内村の出身であると云われている（**写真2**）。復堂の儒

写真２　鉄復堂の生家があったと伝えられる佐那河内村上奥野地域

学者としての学識や、教育者としての業績については、今までにも少なくない論評があるが、その出自についてはほとんど不明と云ってよいほど検索されていない。これについては『復堂詩鈔』のなかで羊我山人が「鉄復堂先生小伝」（３頁～６頁）として次のように記している。

> 家は名東郡上佐那河内の御蔵百姓の小家で世々農業を営んでいた。父は鉄野善助で、後に藤兵衛と改め、その曾祖父以来、御掃除奉公を勤めて来たが、御掃除の株を買うて藩に仕え、徳島に移って、前川の拝領屋敷に住み五十余年に及んだ。宮本氏を娶り四人の男子を生んだが、その第三子が復堂で、安永６年丁酉［1777］に生まれた。

地域の故老の話（安芸守氏談）では、復堂は安芸家から出ているのでないかといわれている。安芸家は上佐那河内村奥野より、現在の下佐那河内村字根郷へ移転してきたのである。

現在の安芸家の墓地に「観現信士、俗名、嘉蔵、文政九戌年［1826］２月４日」と刻まれた墓がある。復堂の幼名が嘉蔵であるが、これを復堂の墓に比定するには年代から見て無理があるとおもわれる。

いずれにせよ、復堂の出自については不明の点があり、今後の検証にまつところが多い。

資料提供

丸井常之進、丸野ユキエ、松尾　肇、安芸　守、安喜哲夫（いずれも佐那河内村）

文　献

文部省蔵判（1892）：『日本教育史資料』冨山房。
佐那河内村史編集委員会（1967）：『佐那河内村史』佐那河内村。
森　正紀（1960）：『復堂詩鈔』徳島史学会。